

「英語教員の聞き取り調査」

高木亜希子(青山学院大学)

工藤洋路 (駒沢女子大学)

重松靖 (国分寺市立第二中学校)

加藤由美子(ベネッセ教育総合研究所)

福本優美子(ベネッセ教育総合研究所)

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2014

▶ 目的

「指導力向上」のヒントを 英語教員に対する聞き取り調査から探る

＜明らかにしたいこと＞

指導で大切にしていること、教育観、
生徒に身につけさせたい力等

<研究メンバー> 高木亜希子 工藤洋路 重松靖

加藤由美子 福本優美子

<オブザーバー> 根岸雅史先生、酒井英樹先生

<時期> 10月、11月

<実施方法> 1人約60分

インタビュアー1名＋サブ1名

インタビュアー: 高木、工藤、加藤、福本
半構造化ヒアリング

<分析方法> TAE

主な質問項目

- ▶ 指導に関すること
指導で大切にしていること(理由、いつから、きっかけ等)
子どもに身につけさせたい力
印象に残っているエピソード
- ▶ 英語の先生になったきっかけ
- ▶ 大学での学び(英語関連、その他)
- ▶ これまでの英語学習経験
- ▶ 自己研鑽
- ▶ これまでの英語使用経験
- ▶ これまでの勤務校

ヒアリング対象

①文部科学省

「新学習指導要領に対応した授業実践事例映像資料」で授業実践をされている先生

中学

- ・土屋裕子先生（静岡県浜松市立入野中学校 DVD出演時：静岡県浜松市立南部中学校）
- ・杉光いづみ先生（佐賀県嬉野市立塩田中学校 DVD出演時：佐賀県鹿島市立東部中学校）
- ・川崎恵美子先生（青森県むつ市立田名部中学校）

高校

- ・植木明美先生（茨城県立竹園高等学校）
- ・津久井貴之先生（お茶の水女子大学附属高等学校 DVD出演時：群馬県立中央中等教育学校）
- ・亀谷みゆき先生（岐阜県立東濃実業高等学校）

②研究メンバーから

- 重松靖先生（国分寺市立第二中学校）
- 工藤洋路先生（駒沢女子大学）

Thinking at the Edge (TAE) : Gendlinら (Gendlin & Hendricks, 2004) が開発した理論構築法
「うまく言葉にできてないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統だった方法 (得丸、2010, p.5)」

得丸 (2010) が質的研究法として応用

分析過程

- Part 1 (ステップ1～5) 「フェルトセンスから語る」
- Part 2 (ステップ6～9) 「実例からパターンを引き出す」
- Part 3 (ステップ10～12) 「理論を構築する」

共通して見えてきたこと (ターム)

子どもに
寄り添う

子どもの発達、興味関心、
子どもを取り巻く環境やそれらを前提とした子どもの心情

自らの成長

英語力、指導力、授業運営力、教育観

最善を求め
続けること

「子どもに寄り添うこと」「自らの成長」すべてに対して最善を求め続ける
「その時その時」の最善と「先を見越しての最善」がある

英語を使う
経験

伝えたいことを英語を使って何とか伝える経験や英語を使って人と
つながった経験等

変化

子どもや社会、教育制度、自分自身の変化に対して、
敏感且つ寛容であること

共通して見えてきたことを、それぞれ先生方の語りからご紹介します。

子どもに寄り添う

20代のころは生徒指導に明け暮れていました。
荒れていた時代です。暴力振うわ、煙草をすうわ。
・・・胸ぐらつかまれても、生徒に向かっていきました。
そういう必死の取り組みの中で、ある生徒が
「自分が荒れるようになったのは勉強がわからなくなってからだ。
勉強がわからないからこうなったんだ。」と。
学校が自分の居場所ではないのはつらいことです。
だから勉強できるようにしてあげたいと思ったんです。

（中学B先生）

子どもに寄り添う

1年生の時に大切なことは、その中学校から高校への橋渡しを、いわゆるブリッジをどういう風にかけてあげるかっていう、そのいわゆる学び直し？

その進学校に勤めていても、英語が大好きで大好きで食っていきたいっていう子もいれば、そうじゃない子もたくさんいて。

苦手な子もいるし、得意なんだけど詰め込まれるっていうことがいやな子もいるし、いろんな子がいるので、・・・(どんな学校でも)あんまり変わらない。

(高校E先生)

子どもに寄り添う

とにかく英語が苦手な子が・・・「僕の夢」と書かせた授業のときに「僕は農家のみかんをつくる人になりたい」と。I want to be a farmer.と。I want to be まで勉強してるので、farmerだけ調べて書いてるんですね。「あと一文、I want to を使って何か書く？」と言ったら、・・・その子が「お父さんのようになりたい」。I want to be like my father.と言ったんです。そして最後に「また一言、決めゼリフか何か決めて書いてごらん。辞書使ってもいい」と言った時に I respect him.と書いたんですよ。もう感動しちゃって。すごく態度も悪いし、能力は低くて、という子が2年生の一番荒れるころにそんなことを紙に書いてるのを見て、私もジーンと来たんですよ。（つづき）

（中学C先生）

子どもに寄り添う

反抗しちよるけど、こんな風に心の中で思っとなりたい、と思ったら、英語ってラッキーと思ったんですよね。

英語って、まだ私たちが教えてる英語は簡単、シンプルな英語なので、いろいろ言葉で飾ることができないからストレートに言わなくちゃいけないですよ。

なので本当はもっとね、日本語だったら書けないようなことも書いてしまう。

素直に言葉に出してしまうというのが、何回もいろいろあるんですけど、その男の子の顔とその言葉はずっと忘れられないですね。

(中学C先生)

子どもに寄り添う

英語は私も教えるための1つの材料になって、
子どもと自分をつなげる材料になってるところもあって、
つながると子どもはそれを自ら使おうとしてくれて、
という感じですかね。

(中学C先生)

自らの成長

テストは子どもへのテストではなく、
自らの指導へのテストだと思っています。

（中学B先生）

生徒に、やっぱり学び続けることを伝えたいと思った時には、
その教員そのものも学び続けていないと、できないと思う。

（高校E先生）

自らの成長

（立場が変わって、いろんな子どもたちを見ての気づき）自分でターンテイクして、何か必要な時に言わなきゃという姿勢（大事なスキル）……今まではいかに作り込んで、きちっとステップを踏ませて、最後の1学期に無理なく持ってくるかという意識があった……「上質なアウトプット」や「上質な言語活動」をする、ということにちょっと寄りすぎてたかなという気が。

（高校D先生）

自らの成長

高校での1年間の経験(交換制度)での気づき

「やっぱり中学校、ここはゴールじゃないと。
この子どもたちは社会に出るまでずっと一本道があって、
その途中に私たちがいるだけなので、先をちゃんと考えた指導
をしないとダメだなと。この子たちの伸びを止めてるのは自分た
ちの責任もあるかもしれないと、・・・。
・・・やっぱり私たちの教えてるのは一過程にちょっといるだけだ
から、先を見て教えないとダメだなと。子どもが困るなというのを見
てて実感したところです。」

(中学C先生)

最善を求め続ける

常に一時間一時間の授業に勝負を賭けていますね。

ものすごく、どれも真剣で、あるいは、生徒の一発言も聞き逃さないとか、ってというような聞き逃しちゃったらrecastもscaffoldingもできないし、そこから学び合いも出てこないので、

あとはその例えば、内容理解にしても、いわゆる普通の英語の返答だと、生徒のやることは場所探しで、内容はわかっていなくても意外と英語の問題の内容って答えちゃうんですよ、形は整えられるんですね。

本当にわかってるかって言ったらわかってないんで。

(高校E先生)

最善を求め続ける

やっぱり教員の言葉ってあとでものすごく大きく響く時があるなあって、これはたまたま良い形で響いていた例なんですけど、でも悪いやつもきつとあるんだろうなと思うけど、そういうのは都合よく耳に入ってこないんですから(笑)なんともわからないんですが、ものすごくやっぱり教員の言葉って、その時に効く、効かないっていうものではないし、そういうところで勝負しちゃいけない。10年、15年後に響けばいい…今勝負するような職業じゃない。白黒つけるものじゃないっていうのはずっと思っています。

(高校F先生)

英語を使う経験

人とつながってほしいというような気持ちを持つようになったのは、実際に一緒に勤めていたALTがアイルランドに帰って、自分がそこで教員になったので「自分が持ってる子どもとうちの子どもと何かつながりませんか？」というようなことを向こうから言ってもらったと。そこ^(アイルランド)もあったし、アメリカもあったし、いろんなところがあったんですよ。

これはやっぱり人がつながるんだというのをすごく意識するようになったのかもしれません。

友人もそれでできたので、親友が自分自身もできたので、ALTの先生と。

(中学C先生)

英語を使う経験

中学2年と3年の(間の)春休みに1回、ロサンゼルスに何日間行ったのかな。21日間か・・・。

あのときはすごく度胸が座って話せたような気がします。
むしろ教員になりたてのほうが間違いが..とか、
何かALTの方が来たときに割とかしこまっていた時期が何年か
あって、そのうちそれも別にどうこうなくなりましたけど、
あのころは間違えを恐れるなんてことはかけらもなかったと思
います。

(中学A先生)

変化

教員の免許のなかで、たったひとつだけ英作文取って、たったひとつだけ音声学を取れば、教員の免許・あとはいろいろな英語の科目取ればなれたんですね。でも今、教えなくちゃいけないのはそっちのほうで、挙句の果てに、習ったことのないスピーキングだとか、習ったことのないリスニングであるとか、こういうことをこう教えなきゃいけなくなり、ほんのちょっとしか教えていなかったライティングが結構メインとなり、私ぐらいの年代の英語の教員っていうのは大変な思いをしていると思うんです。習っていないことを教えることになっちゃったので…

(高校F先生)

変化

(以前の勤務校で小中連携をしていて)毎週小学校に行って英語活動をやってたんです。その時に外国語活動を学んだり勉強したりして、そのもととなるコミュニケーションの部分ですよ、「素地となる」とか言われてると思いますけど、その部分にすごく共感したというのがありますね。(それ以前は)もっと技能面に重きがあったと。中学だから当然なんですけど、文法であるとか、入試がありますので。

でも小学校の外国語活動を通して、やってみて、
グッとさらにコミュニケーションに重きが、自分の意識も向いたし。

(中学A先生)

変化

1989年でしたっけ、ベルリンの壁が崩壊・あの時に衝撃を受けてしまったんです。もうあれはすごいいびつくりでした。ありえないって思っていたのに。あの時、なんでもありだなんて思いました(笑)。だって、やっぱり、あの年ってすごかったですよね、・・・天安門もあの年でしたか・・・なんかあの年、わ！え！ってそういう感じだったので、あ～なんか起こるんだなって、思わないことも起こるんだなってあの時に思ったんです。
(つづき)

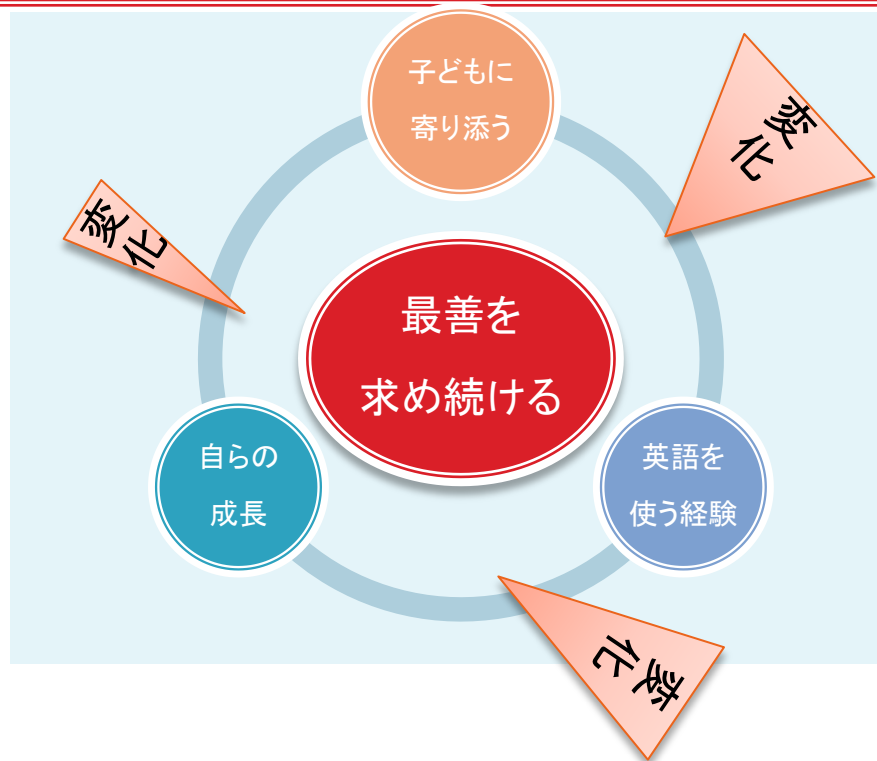
(高校F先生)

変化

私は心づもりをしておかなければなと(笑)、なんでも変わるんだ
なって、そうすると、子どもたちもまあ、大変な時代でしょうねって
いうのは・・ほかにもいろいろな文明を未来を予想する本とかもあり
ましたよね。そういうのを読むとやっぱりすごい色々変わるって
書いてあったのもある。

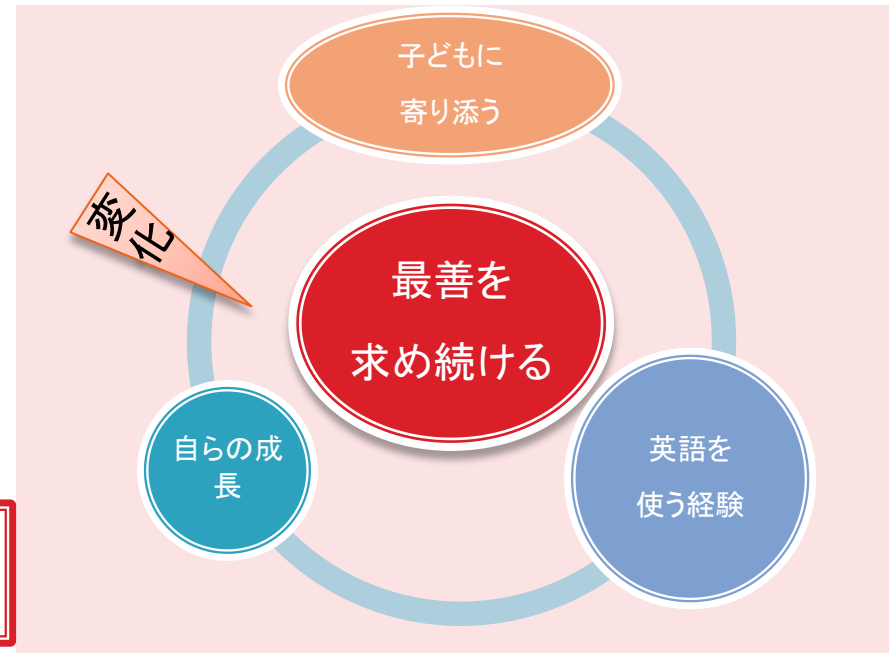
その時代っていうか、体ごと自分が対処しなきゃいけない・・知ら
ない急なことに・・えーと思いきもよらないことに、そういうことはでき
るようにならないとだめねっていう、なんか構えっていうか準備し
とかないといけないとだめね。不意打ちはくるよみたいなこと.....。

(高校F先生)



変化要因が途中で影響しながら
3つのタームが関連しあったり循環しながら
最善を求め続けている。

先生によって、それぞれのタームの
意味することや重さは異なる。



中学A先生

(女性)

旅行好き(国内で行ってない所がないくらい。)好奇心旺盛。
市で中心的な存在で研修等もしている。
英語を聞くことを大切にしている。指導スタイルはどんどん進化。
「いい」と思ったことはとりあえずやってみて、自分に合わなかったり、
ダメなときはすぐやめる。小2の時から英語の習いごと。

中学B先生

(女性)

高校生の時に自分の英語が外国人に通じたことが大きな喜びに。
(田舎にいるけど)世界に羽ばたける力をつけてもらいたい。
楽しく！わかる！力がつく授業を心がけ、子どもの成績に合わせて丁寧な手当てを愛情を持って行う。
ある英語教育の研究会に参加するため定例的に全国へ旅する。

中学C先生

(女性)

好奇心旺盛。英語はそれほど好きではなかった。
大規模校での指導歴が長い。1年間内地留学(大学で)。交換制度で
高校での指導経験も(1年間)。子どもへの寄り添いを大切にする。
音読や英作文のテーマなど、生徒の様子をみて柔軟に応じる。まだまだ子どもを見れていないという反省も。

高校D先生

(男性)

大学時代に留学(1年間)。中学校、中高一貫校、行政の経験もある。それまでの環境からリセットし客観的になる「変化」があった。授業でしかできないことを授業の中核に据える。生徒がよい言語活動を行うことを越えて、主体的に学ぶこと、仲間と学び合う力を育てることを新たな目標にしている。

高校E先生

(女性)

大学のESSの追い込まれた状況で、言語を身に付けた経験を持つ。進学校での指導経験が長く、そこで実績を上げつつ、「英語を使う力」の育成も行う。国の仕事に関わることで視野が広がる。苦手な仲間ともきちんと議論できる人を育てる。英語よりもホームルームの授業の方が、生徒の人気の高いほどである。

高校F先生

(女性)

世の中の知識や世界情勢などに敏感。コミュニケーションにおいて、感情的にならないためにも、事実に基づき論理的に思考することが必要と考える。大学時代に留学(1年間)し、学習者に寄り添うことを学習者の立ち場から知る。子どもの発達や興味に寄り添い、「分かる」喜びを大切にする。

その他事例のご紹介

授業や指導で大切にしていること

海外に出てハッと見たときに後ずさりすることなく“Hi!”と言えるぐらいのコミュニケーション能力を育てたいなというのを一番思ってます。これは英語に関わらずなんですけれども・・・。

（中学A先生）

力がつく授業。生徒をその気にさせる授業。〇〇（先生のお名前）マジックにかかったと子どもが言ったらこっちのもの。テストは子どもへのテストではなく、自らの指導へのテストだと思っています。

（中学B先生）

その他事例のご紹介

授業や指導で大切にしていること

英語ということ以外でも、子どもたちを見るということです。・・・それをもとに授業を組み立てていくというか、ペアを組ませるとか、やってるところです。何かき今日ノリが悪いなと思ったら、こっちが元気を出して音読をいっぱいいつも以上にして音読をする時間を長めに取るとか、深い話がきょうできそうだなと思ったら、生きるっていうことはどういうことかな？というのをちょっとパンと振って、不定詞のところなんかで突然書かせてみるとか。

（中学C先生）

「授業でしかできないことを授業でできるように」
「できるだけ(生徒が)自主的に・・・、自主的にやらせているようにさせるという
か、やってるようにお膳立てする」「あえていくつか梯子をはずした状態で」
「私が前に出ていかない感じがいいなと」「必要なタイミングで辞書を広げたり
・・・ノートを開く・・・少なくとも自分で何かそれが必要だと思った時に必要な
ことができるように」

（高校D先生）

授業や指導で大切にしていること

日本は異常にその、ESLではなくてEFLの世界なので、しょっちゅうこの英語の例文が教室の中で、その生徒とか児童に対して、担っている責任っていうのが大きいと思うんですね。つまり、教室の中で教師が英語の活用のその、練習するとか…

（高校E先生）

「世の中の出来事をいろいろな面から理解していってほしいなということで、英語の…英語教育に特化して言いかえると、まあ、**background knowledge**っていうんですかね。そういうものをたくさん蓄えてほしいなと思うのと、あとやっぱり、この、あの…人と協調しながら自分の意見を言い、人の意見も聞けるようなそういうコミュニケーション能力をつけてほしいなあというふうに思います。」

（高校F先生）

その他事例のご紹介

子どもに身につけてもらいたい力

「英語力というか、英語を扱う態度としては、・・・、人やものに関心を持つというところ、まずね。好奇心がないと会話になりませんよね。わかりたいと思う気持ちとか、わかってもらいたいと思う気持ちは育むと。技能的な英語力で言うと、やっぱり基本的には、私はやっぱり聞くことを大切にしてるかな。聞くこと。・・・聞いて、わかって、聞き直そうとするとか、・・・まるで小学校の外国語活動みたいですけど、それはすごく大事だなと思います。

(中学A先生)

こんな田舎にいるけど、世界にはばたかせたい。
どこに行っても負けない力つけさせたい。
どこでもはばたける力、きちんとした力をつけさせたい。

(中学B先生)

その他事例のご紹介

子どもに身につけてもらいたい力

英語はことばだから使うという感覚。使えるようにさせたい。
英語で人とつながってほしい。社会とつながってほしい。

（中学C先生）

- ・“Any volunteers?” でもいいんですけど、“Any volunteers?” と言っというて、誰か出てきたら私が指すじゃないですか。そうじゃなくて、何か意見があるか？ というふりを私がするかもしれないけれども、それに対してまた意見があるから私が指さなくてもいい。しゃべってる人とはアイコンタクトが取れて「ああ、じゃあ何々さん」と。
- ・必要なタイミングで辞書を広げたりするのと一緒に、ノートを開くタイミングも“Ok, open your note.” とかじゃなくて「ちょっとメモとかノーツを取ってキーワードでブレンストーミングしてごらん」と言ったら「ああ、ノート開いてやらなきゃな」と思って、教科書の裏側にやってもいいというのがちょっと別だけど、少なくとも自分で何かそれが必要だと思ったときに必要なことができるように・・・。

（高校D先生）

その他事例のご紹介

子どもに身につけてもらいたい力

学び続ける力というか、自分自身にそういう学び続けるということを大切にするということをやっぱり生徒さんには、育ってほしいなとは思いますが、そこになんていうのか、例えば、その一部のエリートだけがそれをやれば地球全体が良くなるというわけではなくて、違うじゃないですか。隣に座った今日のペアが、教室のなかで本当に気の合わない子だとしても、でもペアワークをすると決めたのだから、話をするとか、そういった他者の受け入れをすることを考えた時には、どの子にも必要なことだと思う。

（高校E先生）

子どもに身につけてもらいたい力

「いろいろ知識に裏付けられて、あんまりでしゃばらずに自分の意見だけ述べるのではなく、人の意見を聞けて、・・・みんなと協力し合って、コミュニケーション取れるようなお子さんになってほしい・・・。・・・あんまり感情的にならないことも大事なので、やっぱり思考力っていいですか、そういうものも必要だろうなど。でも、やっぱり思考力、批判力っていうのは冷静になるためのものであって、人を攻撃するものではないということをきちんと生徒たちが分からないといけないと思っています。」

（高校F先生）

その他事例のご紹介

印象に残ったエピソード

センター試験で160 近い学年平均の中で、2ケタ、70何点取った子がいて、その子が謝りに来たんですよ、自分のところに。衝撃的でしたね。センター試験って**自分のために受けてるのに**、良かれ悪かれというか、いいところもあったと思うんですよ。多分みんなと一緒に頑張ろうという雰囲気をつくったつもりだったんだけど、なんか70何点だったことで俺のところに謝りに来る前に自分の大学センター試験、英語70何点しか取れない、どこの大学にして二次出願しようかということをお悩みなきゃいけないのに、…。その日に職員室に来て「先生すみませんでした」って。あれは衝撃的でしたね。…やっぱりそこがなんか違ってた。何が、とは言えないけど、なんか違ってたんだなと。**取らせてやれなかったことへのすまなさ**もあるけど、…だから一番うまくいったなと思った学年でも、子どもたちでも、うまくいったと自分なりに思い通りに描いた指導だと思っててもやっぱり何かあるんだなと。全然見えてなかったですからね。

(高校D先生)